

# 紙上法話

## 如何なるか是れ晋山の雨

センター布教師 宗光寺住職

垣井龍頭



今から二十六年前、私が二十六才の時でした。先住の突然の遷化により、当寺の住職を拝命することとなったのです。まさに青天の霹靂でした。それからと言うもの、こんな未熟な私でしたが有縁のご寺院様方、お檀家さんの並々ならぬご法援により、二年後、何とか晋山結製の法会を修行させて頂くこととなったのです。私にとつては無上の喜びでした。

いよいよ、晋山結制法要の前日です。天気も好天に恵まれ、諸行事も順調に進行していましたので、このまま予定通りに大法要も円成することと思っておりました。ところが、法要当日を迎え、稚児行列がいよいよ出発しようとしたその時、一天俄かに掻き曇り雨が降り始めたのです。この日、稚児行列と一緒に当寺の山門を潜ることをどれ程夢見たことか。ああ情けない。しかし、そんな愚痴を言っている時間などありません。行事日程は粛々と進んでいったのです。

そして、いよいよ新命住職にとって晴れの舞台でもある大問答が始まったのです。緊張の度合いも最高潮です。ご寺院様方より、さまざまなお問いが、ここぞとばかり投げかけられるのです。しかし、新命住職、元よりそれらの問いに答えられるような力量などある筈もなく、予め頭の中で用意していた言葉をただ答えるばかりでした。そんな中、次のような問いが投げかけられました。「如何なるか

是れ晋山の雨」と。それに対して、私は少し間をおいて、「不徳の致すところ」と答えたのです。

雨は決して、私の都合で降ったり止んだりする訳ではないのです。ただ、自分の勝手な思いをあれこれと思い巡らすことにより、ついには真実を見失ってしまうのです。そして、それが愚痴になり、不満になって自分自身を雁字搦めにしてしまうのではないのでしょうか。

禅問答や古則公案の中の問いは、それが既に答えなのだ、以前お師家様が言われたことを思い出します。これは、私の都合を差し挟むことの誤りをお示しくくださったのだと思うのです。今ならば「如何なるか是れ晋山の雨」と問われれば、私は「雨も好し、晴れも又好し、ただこれこれ 雨が降れば傘を差す」と答えるでしょう。人生万般にわたって妄念や執着心を起こさず、そのことになりきり一息一息に全身全霊を打ち込むことが、他でもない只ひたすらに行じる坐禅の姿に通じることだと思っております。

悲喜交々あらゆるご縁を頂戴したおかげで、今頃になってやっと「晋山の雨」をそのままに頂くことが出来たような気が致します。